

提 言 書

～いわて文化支援ネットワークの活動から～

『震災から8年 持続可能なコミュニティ形成のために』



目次

I はじめに	2
II 活動報告	
市民参加の舞台振興と持続可能なコミュニティ形成活動	
・沿岸被災地市民参加劇実施にかかる課題と対策の冊子発行	4
・みやこ市民劇の継続支援	4
・市民参加劇未実施地域への啓発	5
地域・世代・異ジャンルの交流と次世代を育む活動	
・二戸＝宮古演劇研修	6
・子どもアーティストのアウトリーチ育成と交流推進	6
・こども劇団みやこデイジーの育成と交流推進	7
被災地・被災者からの思いを伝え語り継ぐ活動	
・「いわて震災エッセイ2019」の発行	8
・演劇公演「ジョバンニの切符」レジデンス支援	9
文化による支援を啓発する活動	
・「いわて文化復興支援フォーラム」開催	10
III 沿岸地域における学びの場の現況についてのアンケート調査集計結果報告	
・市町村からの回答	12
・文化施設・団体からの回答	18
・一般市民からの回答	25
・ヒアリング調査①（平田地区生活応援センター）	30
・ヒアリング調査②（宮古市中央公民館）	32
・ヒアリング調査③（久慈市立図書館）	34
IV 現地の声	
・市民劇を通してみる宮古の今と市民劇のこれから	38
・一音楽教室の現場からみた被災地・陸前高田	41
・三陸国際芸術祭について	43
・大震災の記憶のために	45
V まとめ「文化による持続可能なコミュニティづくりへ」	48

.....

I はじめに

.....

はじめに

今年の1月6日、宮古市民文化会館中ホールで、「みやこ市民劇ファクトリー」の旗揚げ公演が行われました。音楽朗読劇という音楽がさかんな宮古らしい企画でした。三陸を縦断する三陸鉄道の再開に思いを馳せた公演で、満席の客席からは感涙の声が聞こえていました。

本事業の一環として実施した昨年2月の「みやこ市民劇」が大成功を収め、7月には、市民劇の継続実施のために新たにみやこ市民劇ファクトリーが発足しました。参加者は30名強。市民劇を核とした新たなコミュニティの誕生です。

文化を核としたコミュニティの形成は、平成29年度に改正された「文化芸術基本法」や平成24年度に制定された「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」の趣旨である「まちづくり」への役割、「人々が共に生きる絆を形成する」役割にも合致します。本事業は、被災地の復興を、文化という切り口でコミュニティを形成し、持続可能な地域づくりに寄与することを目的にしています。

但し、未曾有の大震災後に、文化芸術がどんな役割を持って復興に寄与できるかという前例もマニュアルもありません。私たちは、被災地の方々とともに、試行錯誤を繰り返し、様々な事業を行って、新しい道を切り開いていきたいと考えています。

その中で、みやこ市民劇ファクトリーのような文化を核とした新たなコミュニティが誕生したことは、これまでの活動の成果として誇らしい限りです。また、宮古で平成27年度から育成しているジュニアアンサンブルや子ども劇団も順調に地域の方々との交流を深めています。心の中に沈降している思いを解き放そうと始まった震災文学公募も詩、短歌、エッセイと続き、その思いを出版物、そして朗読劇として拡散できるようになりました。これらを発展的に継続し拡散して、新たなコミュニティづくりに寄与したいと思います。

この提言には、様々な事業の報告と地域からの思いの発信が主ですが、その文章の中いくつかの課題も提起されています。これらの一つひとつに向き合っていかななくてはならないと考えています。

持続可能な地域づくりのための文化芸術の役割が、多くの人々の共通認識となればと願ってやみません。

平成31年2月25日

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
理事長 坂田 裕一

.....

II 活動報告

.....

活動報告

市民参加の舞台振興と持続可能なコミュニティ形成活動

(1) 沿岸被災地市民参加劇実施にかかる課題と対策の冊子発行

発行：平成31年3月（予定） A5版400部

沿岸被災地で市民参加劇を実施する際の課題やその対策について、専門家の意見や識者の論評を加えるとともに、市民参加劇関係者のディスカッションやヒアリング調査を行うなど検証・研究を行った。その成果を「市民参加劇読本『市民劇をつくり続けるために』』という冊子にまとめ、沿岸各地の自治体・文化施設・舞台関係者・地域づくり関係者に広く配布する。



ディスカッションの様子



釜石市民劇場・久保氏へのヒアリング

(2) みやこ市民劇の継続支援

運営指導：平成30年7月27日（金）・8月31日（金）（講師：坂田 裕一）

朗読指導：平成30年9月13日（木）（講師：坂田 裕一）

平成30年10月28日（日）（講師：IBC岩手放送アナウンサー 大塚 富夫）

舞台照明研修会：平成30年12月9日（日）（講師：工藤 雅弘）

みやこ市民劇ファクトリー第1回公演 音楽朗読劇「ひらけ！笑顔と希望の鉄の道」

平成31年1月6日（日） 宮古市民文化会館 中ホール 入場者数：250名

昨年2月に初開催した「みやこ市民劇」の参加メンバーが中心となり、市民団体「みやこ市民劇ファクトリー」を立ち上げた。「みやこ市民劇」が参加者の自主活動を継続すること

によって持続可能なものとなり、市民劇を通じた新たなコミュニティづくりに寄与できるよう、「みやこ市民劇ファクトリー」の立ち上げ支援と指導者派遣を行った。

専門家の指導を受けた33名の団員たちは、第1回公演として、沿岸の復興の象徴である三陸鉄道をテーマにした音楽朗読劇を行い、会場からは大きな拍手が送られた。



大塚アナウンサーによる朗読指導



音楽朗読劇「ひらけ！笑顔と希望の鉄の道」

(3) 市民参加劇未実施地域への啓発

陸前高田で市民劇を考えよう！～みやこ市民劇ビデオ上映会～

平成30年12月1日（土） アバッセたかた 参加者数：24名

未だ市民参加劇未実施である陸前高田市で市民劇開催の機運を上げるために、一般市民を対象として、昨年2月に第1回公演を行った「みやこ市民劇」の公演の様相を上映した。参加者からは「宮古のような市民劇が陸前高田でも実現出来たらいいと思う」等の声が聞かれた。また、本上映会での反響を基に、陸前高田市で市民参加劇の学習会を行う予定である（3月実施予定）。



みやこ市民劇ビデオ上映会

地域・世代・異ジャンルの交流と次世代を育む活動

(1) 二戸＝宮古演劇研修

スタッフリーダー研修：平成30年10月19日（金）～21日（日）

（講師：二戸市民文士劇スタッフ 舘林 克典・工藤 雅弘・大清水 文子）

二戸市民文士劇 舞台研修：平成30年10月21日（日） 参加者数：15名

みやこ市民劇ファクトリーのメンバー3名が、二戸市民文士劇公演の準備から公演終了までの3日間、舞台・照明・衣装の専門スタッフによる実地研修を受けた。現場で体験しながら実践的な指導を受けられ、宮古での活動に活かせる技術を学ぶことができた。

また、公演当日には、みやこ市民劇ファクトリーのメンバー15名が二戸へ赴き、リハーサルを見学したり演出家及び舞台スタッフによる解説を伺うなど有意義な舞台研修を行った。観劇後、二戸市民文士劇の出演者やスタッフとの懇談交流もあり、テクニカル面での疑問点などを質問し、新たな知識を吸収することができた。



スタッフリーダー研修



二戸市民文士劇 舞台研修

(2) 子どもアーティストのアウトリーチ育成と交流推進

ジュニアアンサンブルみやこは、岩手芸術祭管弦楽フェスティバル2018への出演と2～3月に実施予定のアウトリーチに向けて、いわてフィルハーモニー・オーケストラメンバーによる指導を受けた（平成30年12月1日、宮古市民文化会館展示室）。子どもたちは、プロのオーケストラの魅力に触れながら、初級・中級・上級クラスに分かれて具体的な技術指導を受け、とても有意義な時間を過ごした。翌日（12月2日）に開催された管弦楽フェスティバルでも積極的に演奏することができた。



中級クラスの指導



管弦楽フェスティバル2018の様子

(3) こども劇団みやこデイジーの育成と交流推進

参加者：小学校3年生～中学校2年生 16名

公演：平成31年2月24日（日）

会場：宮古市民文化会館 大ホール

第3回公演「銀河鉄道の夜」

原作 宮沢 賢治

脚本 阿部 正樹

演出 ハ木 絵里

舞台監督 白石 雅一

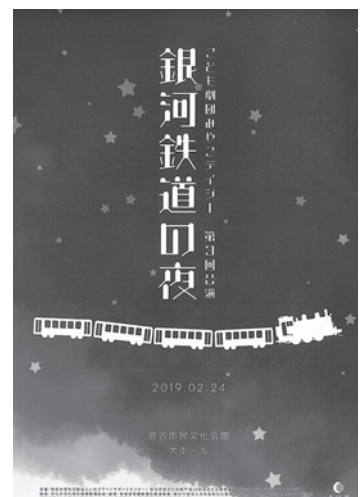
歌唱指導 金野 侑

振付指導 山手 清加

舞台美術 長内 努

作曲 岩澤 美紀

照明 藤村 勝好



第3回公演「銀河鉄道の夜」チラシ

一昨年度に設立された「こども劇団みやこデイジー」の今年度の活動は、第3回公演「銀河鉄道の夜」への取組みとなった。2月の公演に向けて7月から稽古を始め、演出や歌唱・ダンスの指導は盛岡等から派遣された講師が行った。過去2回は中ホールでの開催であったが、3年目の今回は大ホールでの公演に初挑戦することとなり、子どもたちの新たな可能性を引き出し、次への大きなステップアップとなった。



第3回公演へ向けての稽古

被災地・被災者からの思いを伝え語り継ぐ活動

(1) 「いわて震災エッセイ2019」の発行

募 集：平成30年8月～10月

発 行：平成31年2月 A5版500部

選考委員：池田克典（前岩手県文化振興事業団理事長）

小山田泰裕（岩手日報社編集局学芸部長）

斎藤 純（作家）

高橋万見子（朝日新聞社盛岡総局長）

震災から7年を経て、被災体験や被災地を思いやる気持ちを今こそ伝えてもらおうと、岩手在住者や出身者など岩手ゆかりの方々から「震災エッセイ」を募集した。県内外から集まった69編から、すぐれた作品を選考してエッセイ集500部を発行した。10代から90代までの幅広い世代から寄せられた作品は、震災から学んだ後世に語り継ぐべき教訓と、明日を見すえた力強い希望に満ち溢れていた。エッセイ集は無料で、県内外の図書館や文芸団体などに贈られた。



エッセイ集「いわて震災エッセイ2019」

(2) 演劇公演「ジョバンニの切符」レジデンス支援

公演名：アンソロジー宮澤賢治 イーハトーヴォ発「ジョバンニの切符」

構成：坂田裕一 こむろこうじ 新井浩介 多田純也

脚本：こむろこうじ 新井浩介

演出：大谷賢治郎

出演：坂元貞美 古舘一也 畠山泉 山井真帆 かとうちあき 山村佑理 岩崎野花

脚本打合せ：平成30年11月24日（土）

出演者ワークショップオーディション：平成30年11月25日（日）参加者4名

稽古日程：平成31年1月8日（火）、2月18日（月）～22日（金）、

3月6日（水）～20日（水）

稽古場：いわてアートサポートセンター 風のアトリエ

[盛岡公演] 平成31年3月22日（金）～24日（日）4ステージ 風のスタジオ

[久慈公演] 平成31年3月29日（金）～30日（土）2ステージ 久慈市文化会館 小ホール

被災地の思いをのせた演劇作品を岩手で製作し発信する事業として、アンソロジー宮澤賢治と銘打ち、震災からの祈りと鎮魂、さらに未来に向けての被災地の思いを、レクイエムでもある「童話・銀河鉄道の夜」に重ね合わせ、宮澤賢治作品をモチーフにした新たな演劇作品づくりを行う。東京から招聘した演出家と2名の俳優を盛岡に長期滞在させ、アーティスト・イン・レジデンスで地域俳優・地域スタッフとの共同作業により作品を製作し、県内2か所で公演を実施予定。この作品作りにかかる準備や演出家による出演者ワークショップオーディション、レジデンス等への支援を行う。



出演者ワークショップオーディション



出演者・スタッフ 顔合わせ

文化による支援を啓発する活動

「いわて文化復興支援フォーラム」開催

日 時：平成31年3月10日（日）午後1時30分～

会 場：もりおか町家物語館 浜藤ホール

第一部 いわて震災エッセイ2019 入賞作品授賞式

朗読発表 ～公募震災エッセイより～

出演：坂元 貞美・佐藤 くみこ ピアノ演奏：鈴木 牧子

「いわて震災エッセイ2019」最優秀賞・優秀賞・入選受賞者にご出席いただき、賞状・エッセイ集を贈呈。また、被災した方々や、被災地に寄り添う方々からお寄せいただいた69編のエッセイから4編を選び、ピアノの演奏に乗せて、俳優やアナウンサーによる朗読として上演。

第二部 ディスカッション「震災からの思いを語り継ぐ、今、求められること」

出演：外岡 秀俊（作家・元朝日新聞社東京本社編集局長）

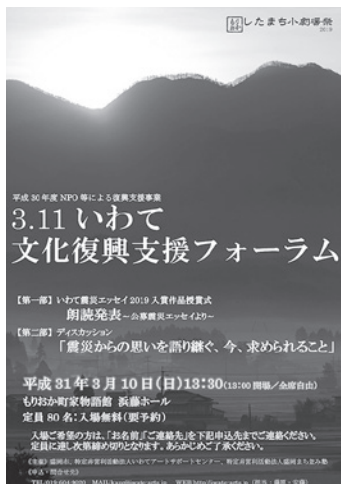
荒木 奏子（「にじのライブラリー」前現地責任者）

神久保 敬里（「いわて震災エッセイ2019」最優秀賞受賞者）

コーディネーター：坂田 裕一

（特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター理事長）

被災地の文化的な復興について、識者や関係者をゲストに招いて「震災からの思いを語り継ぐ、今、求められること」をテーマに、ディスカッションを実施。



「いわて文化復興支援フォーラム」チラシ

.....
**Ⅲ 沿岸地域における学びの場の現況に
ついてのアンケート調査集計結果報告**
.....

沿岸12市町村からの回答

芸術文化の学びの場にかかる アンケート調査

【1】沿岸12市町村からの回答

調査の概要

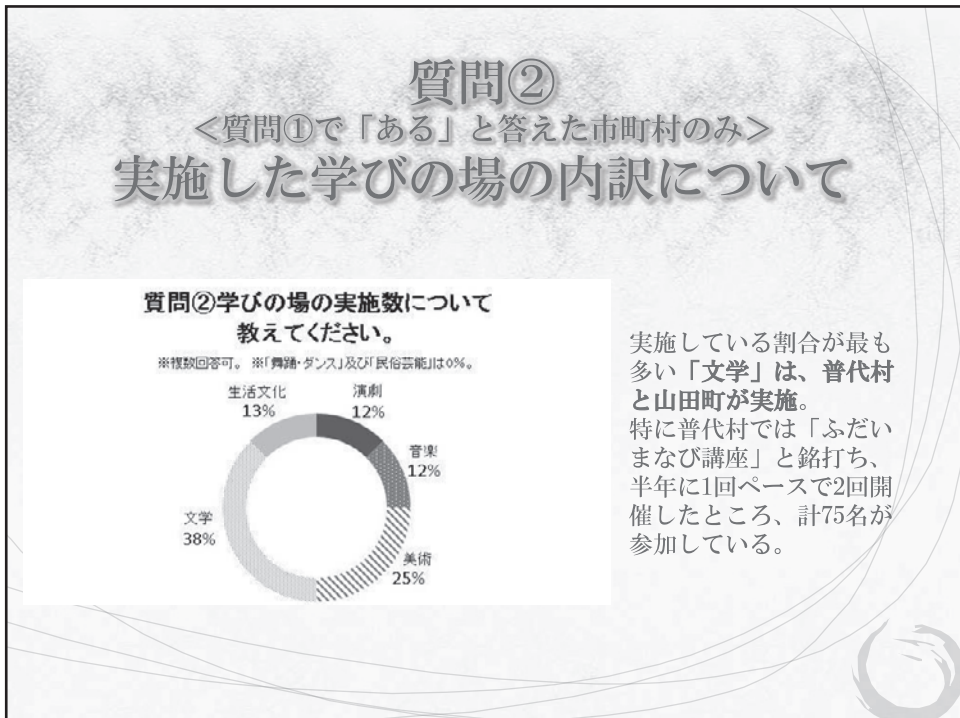
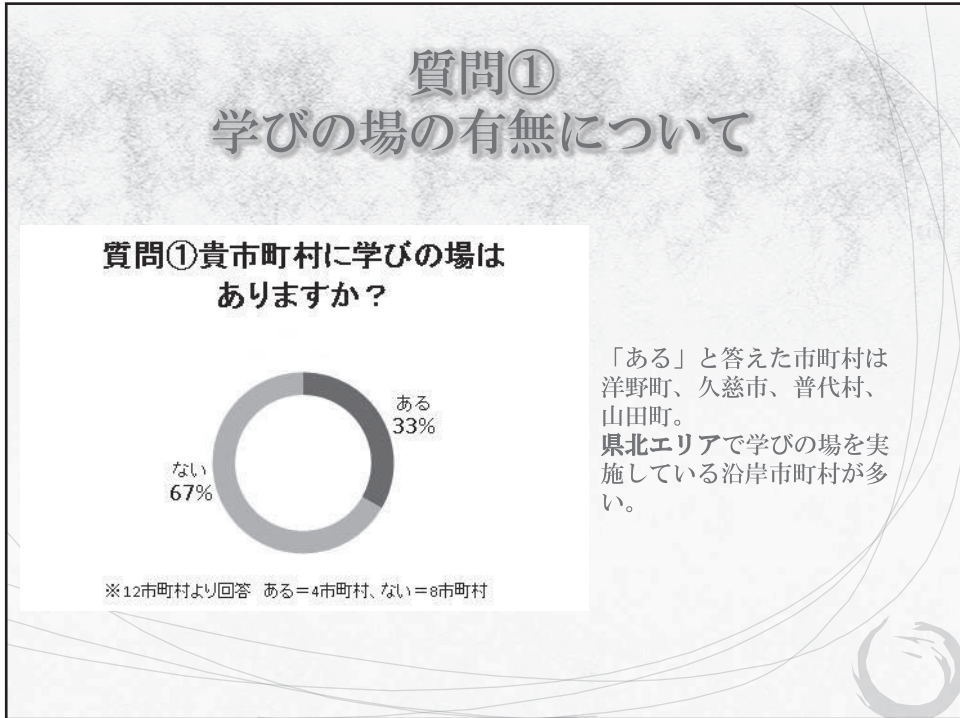
【調査方法・対象】

- ・アンケート方式
- ・岩手県内沿岸12市町村の芸術文化振興担当課

【回答者】

沿岸12市町村へ回答を依頼
→12市町村より回答があった。

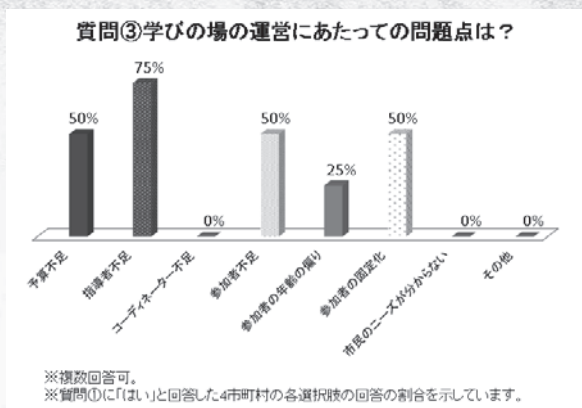
被災地における文化芸術活動の指導者不足、後継者不足等の解消の手立てとして、沿岸市町村や文化施設、一般市民等へのアンケート調査および3施設へのヒアリング調査を実施した。アンケートは沿岸被災地における芸術文化の学びのための現状を把握するもので、その結果から後継者育成や次世代育成の課題を明らかにしたい。



学びの場の実施例

市町村	講座名	会場	参加人数
久慈市	合唱ワークショップ	アンバーホール 小ホール	21人
洋野町	演劇	洋野町民文化会館	50人
普代村	ふだいまなび講座	役場大会議室	50人
	ふだいまなび講座	役場大会議室	25人
山田町	初歩の古文書解読講座	-	23人
	押し花で額を作ろう	-	15人

質問③ 運営上の課題について



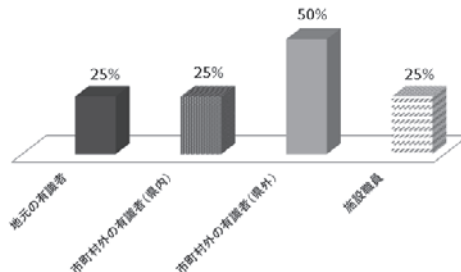
複数回答可としたところ、「指導者不足」の割合が最多となった。芸術文化の後継者のみならず、指導者不足が進行している現状が窺える。一方で「コーディネーター不足」「市民のニーズが分からない」「その他」が0%となっている。

質問④ ③の改善策について

- ・ 普代村：「指導者不足」「参加者不足」に回答
…村広報誌や告知端末での周知、チラシの全戸配布など、なるべく多くの人たちに周知するよう努力している。
- ・ 山田町：「指導者不足」「参加者不足」「参加者の年齢の偏り」「参加者の固定化」に回答
…学童クラブを対象とした講座を実施している。
子どものうちに芸術文化を楽しく思えるよう工夫していて、好評である。

質問⑤ 学びの場における指導者・講師について

質問⑤学びの場における指導者・講師について



※複数回答可。
※質問④に「はい」と回答した4市町村の各選択肢の回答の割合を示しています。

実施市町村内にとどまらず、県内外から有識者を招いて学びの場を設けたケースが50%となった。

「実施・運営上の問題点」で「予算不足」を挙げながら県外の有識者を招聘しているケースもあり、質の高い芸術文化の学びの場を設けたい意図がうかがえる。

質問⑥

後継者となりうる若年層を 対象とした取り組みについて

- ・複数回答可としたところ、得られた有効回答は3市町村より3件。
- ・「講座参加費・文化芸術施設入場料の減免」が1件、「芸術に触れるきっかけとなる催事の開催」が2件となった。

質問⑦

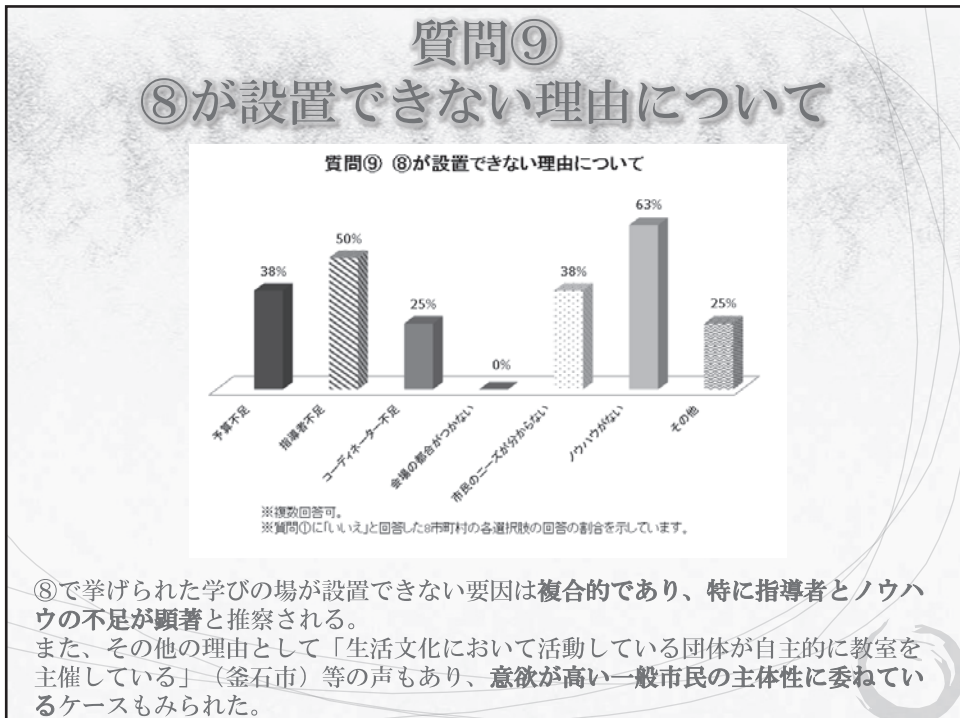
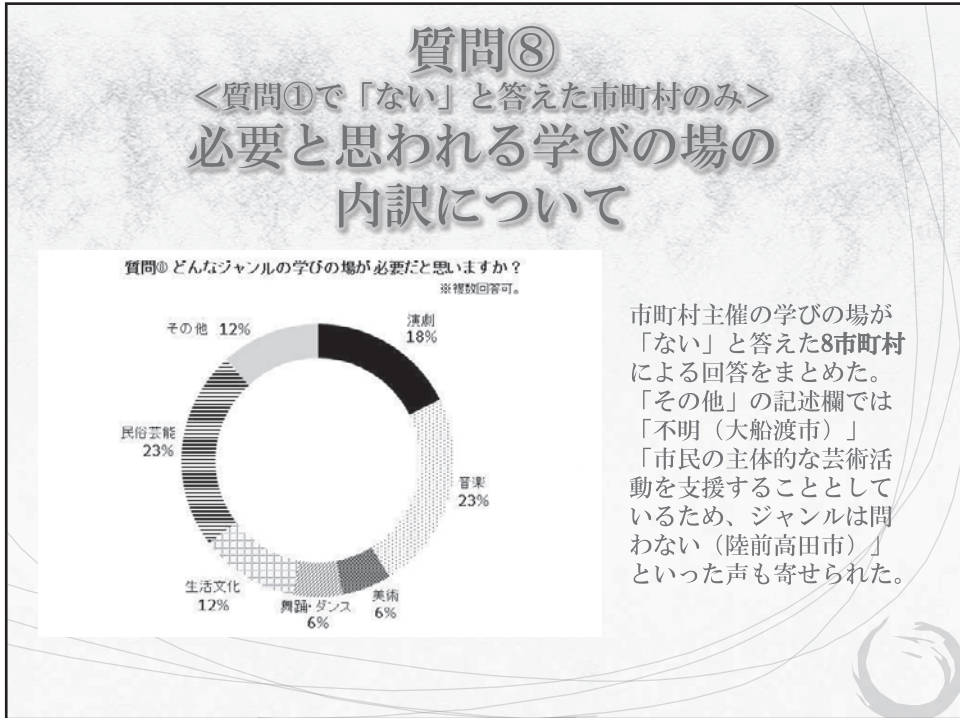
今後開設したい学びの場の ジャンルについて

質問⑦今後開設したい学びの場のジャンルについて

ジャンル	割合
音楽(ミュージカル・オペラ・劇団含む)	50%
音楽(合唱・管楽含む)	50%
美術(工芸・写真含む)	25%
舞踊・ダンス	25%
文学	0%
生涯文化	0%
地域文化	25%
その他	0%

※複数回答可。
※質問⑦に「はい」と回答した4市町村の各選択肢の回答の割合を示しています。

既に実施しているジャンルの学びの場を選択している市町村がほとんどであった。現在運営している学びの場を**継続・発展させたい意向**の表れと思われる。



文化施設・団体からの回答

芸術文化の学びの場にかかる アンケート調査

【2】文化施設・団体からの回答

調査の概要

【調査方法・対象】

- ・アンケート方式
- ・沿岸12市町村内の文化施設・団体（公民館、文化会館、図書館、市町村芸術文化協会）

【回答者】

沿岸市町村の文化施設・団体（68件）へ回答を依頼

→40団体より回答があった。

質問① 学びの場の有無について

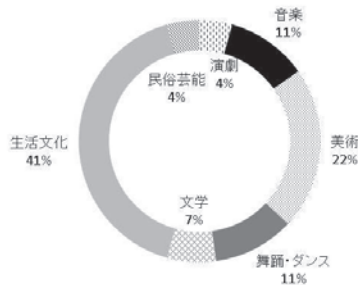
質問①貴施設(団体)主催の
芸術文化の学びの場はございますか？



「ある」と答えた施設・団体は14箇所。
うち釜石市が5箇所、大船渡市が4箇所と**県南エリア**に集中しており、**県北エリア**に集中していた市町村と対照的な結果となった。

質問② ＜質問①で「ある」と答えた施設・団体のみ＞ 実施した学びの場の内訳について

質問②学びの場の実施数について
教えてください。



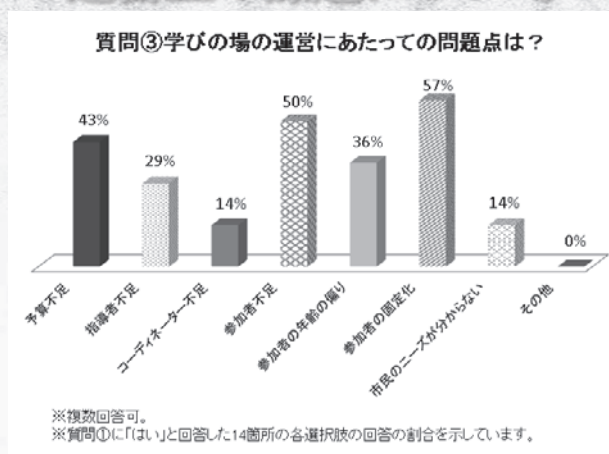
茶道・華道・書道等を想定した選択肢である「生活文化」が4割を占めた。

一例として、釜石市立平田公民館の「ミニ茶会」や末崎地区公民館（大船渡市）の「生け花教室」等がある。

学びの場の実施例（一例）

施設・団体	講座名	参加人数
釜石市立平田公民館	ミニ茶会（おせん茶）	26人
	フラダンス教室	25人
	音楽サロン （母の日コンサート）	23人
	書道教室	21人
	七宝焼き体験	14人
	音楽サロン （童謡を歌う会）	12人

質問③ 運営上の課題について



複数回答可としたところ、「参加者の固定化」が全体の割合最多の57%となった。同選択肢を選んだ全8箇所は「参加者不足」「参加者の年齢の偏り」も選択する傾向が高く（それぞれ4箇所、3箇所）、一般市民への働きかけに苦慮する姿が推察できる。

質問④

③の改善策について（一例）

- ・大船渡市立綾里地区公民館：「予算不足」「指導者不足」「参加者不足」に回答
…地域参加型システムを取り入れ、皆で参加している。
- ・宮古市中央公民館：「参加者の固定化」「市民のニーズが分からない」に回答
…公共施設中心であったポスターやチラシの配布に加え、スーパーなどへの配布も行うようにしている。
- ・釜石市鵜住居公民館：「参加者不足」「参加者の年齢の偏り」「参加者の固定化」に回答
…参加者の友人・知人への紹介を参加者へ依頼。

質問⑤

学びの場における指導者・講師について

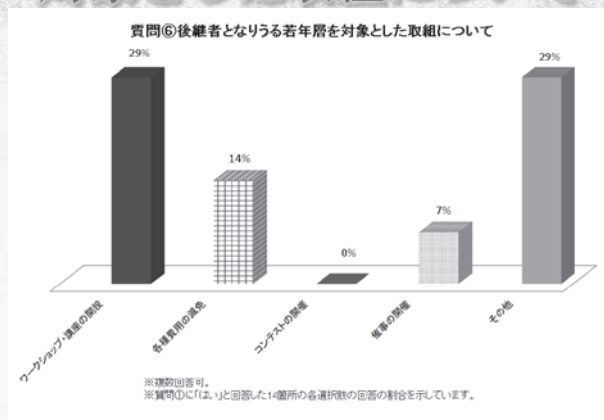
質問⑤学びの場における指導者・講師について

指導者・講師の種類	割合 (%)
地元の有識者	57%
市町村内の有識者(県外)	21%
市町村外の有識者(県外)	29%
施設(団体)職員	50%
その他	7%

※複数回答可。
 ※質問時に「はい」と回答した14箇所の各選択肢の回答の割合を示しています。

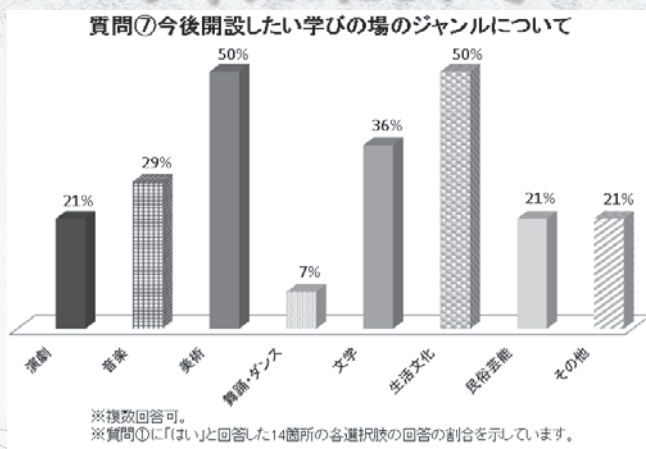
市町村内の有識者（57%）や施設（団体）職員（50%）を講師として学びの場を設けたケースが5割を超えた。
 その他として「内容に適した講師」（赤崎地区公民館）との声もあった。

質問⑥ 後継者となりうる若年層を 対象とした取組について

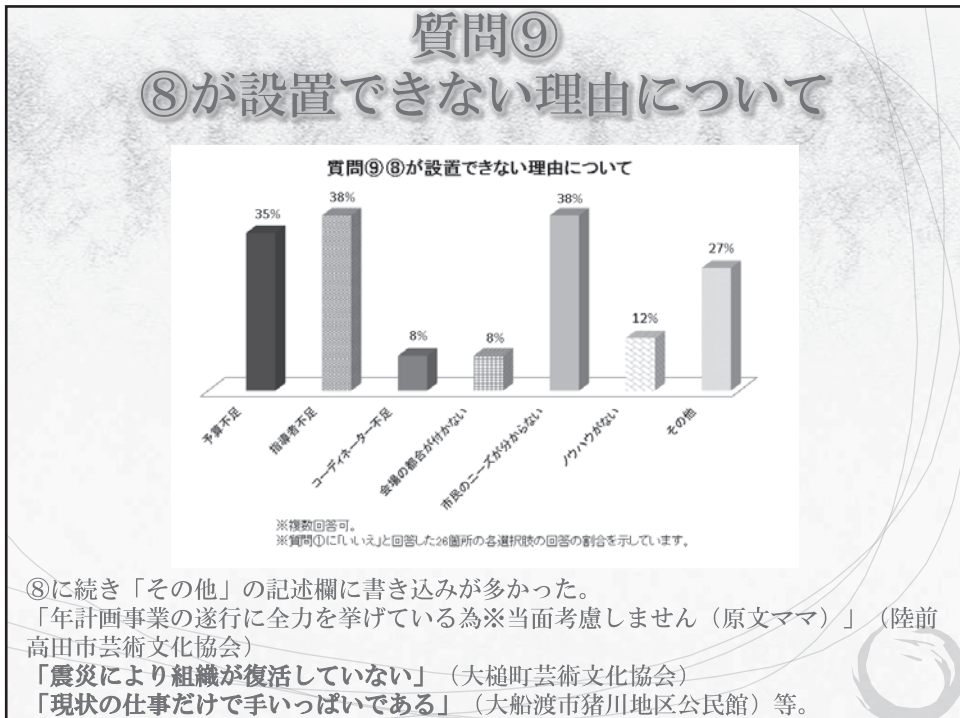
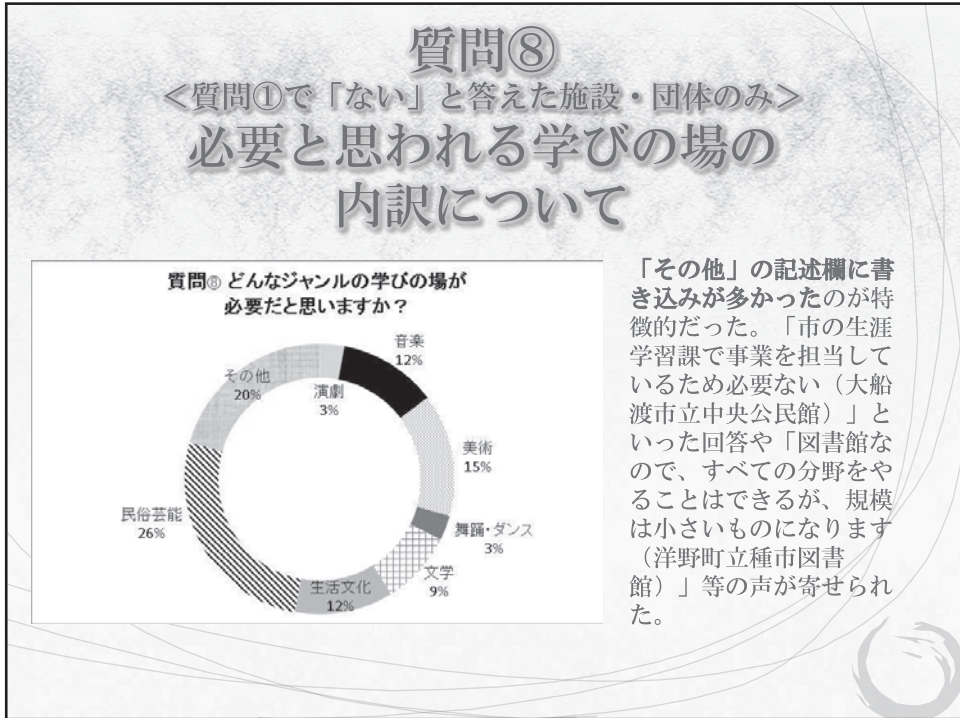


「その他」(29%)として最も多かったのは、4箇所が回答した「行っていない」となった。
学びの場が「ある」と答えた全施設・団体中でも無回答が5箇所と最も多く、**現行の学びの場の運営に主眼が置かれている結果**と思われる。

質問⑦ 今後開設したい学びの場の ジャンルについて

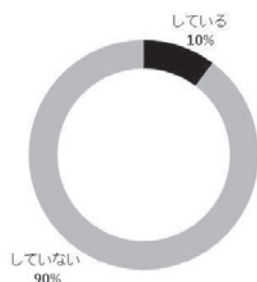


「その他」の自由筆記欄で挙げられていた内容の内訳は「歴史・史跡」が2件、「料理・ものづくり等の実習」が1件となっている。



質問⑩ アウトリーチの有無について

質問⑩ アウトリーチを実施していますか？



「ある」と答えた施設・団体は4箇所。
うち3箇所が実施目的として「文化芸術を通して地域の課題（教育、福祉等）を解消するため」と回答している。

アウトリーチの実施例（一例）

施設・団体名	内容	派遣場所
釜石市民ホール	長唄三味線訪問コンサート	市内老人ホーム 2ヶ所
宮古市民文化会館	高橋多佳子 ピアノミニコンサート	市内小学校 3校
陸前高田市 芸術文化協会	俳句研修会	陸前高田市 コミュニティホール
久慈市立図書館	図書修理教室	市内小学校

- ・実施上の問題点を尋ねた結果（複数回答可）3箇所が「予算不足」を挙げている。

一般市民からの回答

芸術文化の学びの場にかかる アンケート調査

【3】一般市民からの回答

調査の概要

【調査方法・対象】

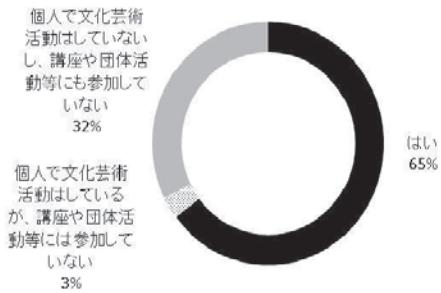
- ・ アンケート方式
- ・ 岩手県内沿岸市町村在住の一般市民

【回答者】

沿岸市町村の一般市民へ回答を依頼
→34名より回答を得た。

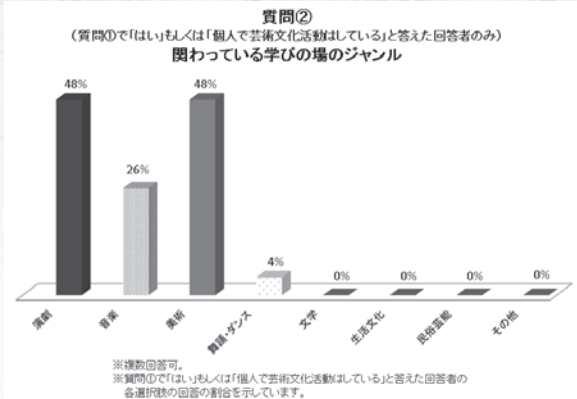
質問① 学びの場への参加について

質問①芸術文化の学びの場に参加していますか？



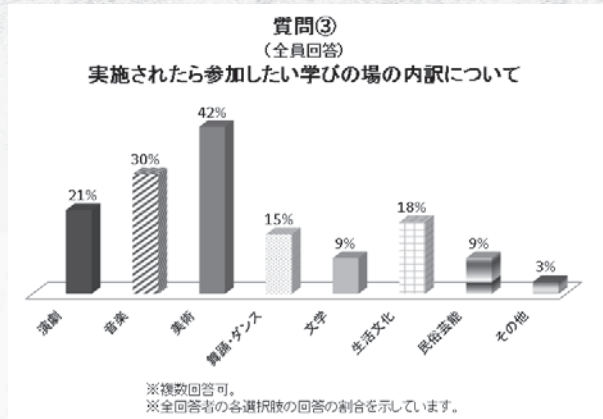
「参加している」もしくは「個人で文化芸術活動をしているが、講座や団体活動等には参加していない」と答えた回答者が**全体の7割**を占めた。

質問② ＜質問①で「はい」もしくは「個人で芸術文化活動はしている」と答えた回答者のみ＞ 関わっている学びの場のジャンル



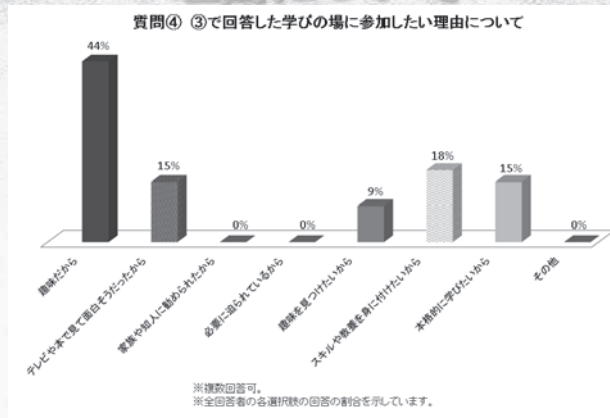
一例として、「舞踊・ダンス」と回答した宮古市の40代女性は「音楽」にも参加していた。
上記のように、複数のジャンルに参加していた回答者は、芸術文化活動を行なっている一般市民全体の18%となっていた。

質問③ 実施されたら参加したい 学びの場の内訳について



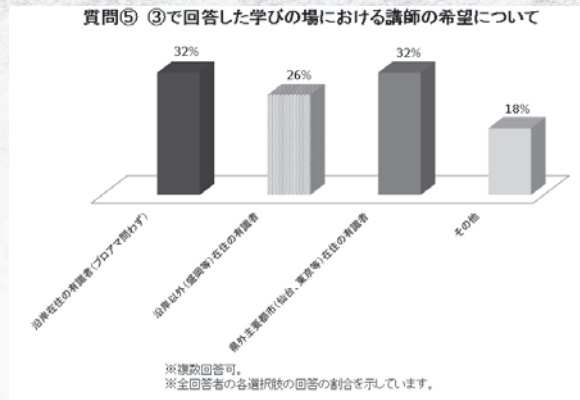
「美術」が42%を占めた。
また、質問②においては「関わっている」との回答が0%だった「生活文化」が18%、「民俗芸能」が9%となるなど、ニーズとのミスマッチが発生している。

質問④ ③で回答した学びの場に参加したい 理由について



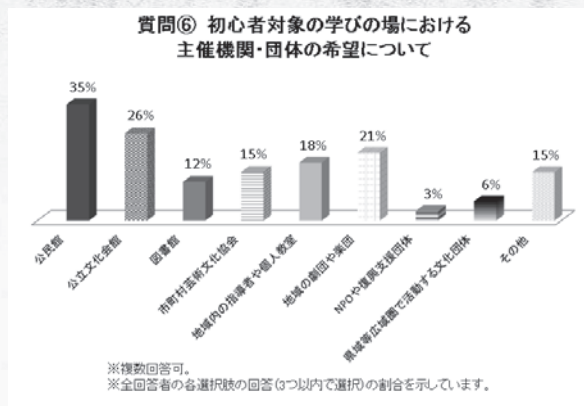
「趣味だから」が44%となるなど、参加者の主体的な活動をうかがわせる回答が多数寄せられた。
一方、「必要に迫られているから」等、参加者自身の意欲によるものでない回答は0%となっている。

質問⑤ ③で回答した学びの場における 講師の希望について



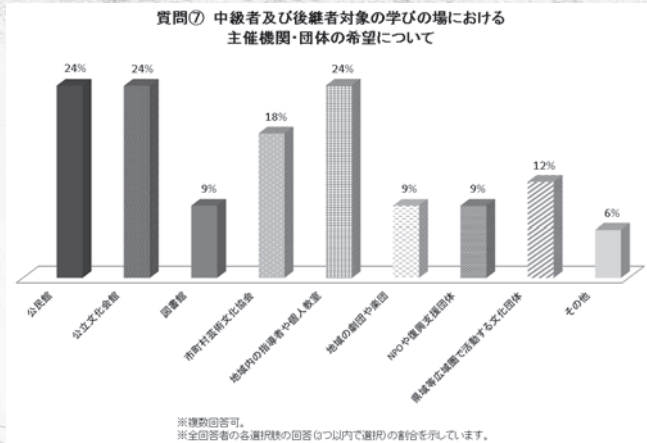
「県外主要都市在住の有識者」が32%を占める等、質問④に引き続き、参加者のスキルアップへの意欲を感じさせる結果となっている。「その他」としては「俳句の夏井先生（テレビ番組「プレバト!!」等で活躍中の夏井いつき氏と思われる）」という具体名が挙げられた。

質問⑥ 初心者対象の学びの場における 主催機関・団体の希望について



「公立文化会館」「公民館」など、利便性を求めた結果と推測される声が挙がる一方、その他として「特に問わない」（60代以上女性、市町村不明）「参加出来るならどこでも」（60代以上女性、宮古市）という意見も見られた。

質問⑦ 中級者及び後継者対象の学びの場における 主催機関・団体の希望について



回答の傾向は質問⑥に近い。ただ「地域の劇団や楽団」が9%と、質問⑥(21%)から大幅に減少している。

質問⑧ 一般市民対象の学びの場に対する 意見・要望

- ・60代以上女性（大船渡市）：大船渡市は中央から遠いという欠点がありますが、**地域の中の人材を掘り起こすと**、様々なジャンルに通じた方が存在しているようです。そういった方を掘り起こすアイデアが欲しいです。
- ・50代女性（釜石市）：学びの場を開催する際、**時間帯の幅があると選択しやすい**と思う。平日や仕事帰りに参加しやすい等、様々な生活スタイルの人向けにあれば良いと思います。
- ・40代女性（宮古市）：**ある程度同じ年齢の方と出ると良い**と思います。なので、曜日ごとに具体的に対象者を募るとか工夫して欲しいです。

学びの場の現況についてのヒアリング調査①

平田地区生活応援センター（釜石市）

ヒアリング対象者：小笠原 誠 氏（平田地区生活応援センター係長）

【学びの場の運営について】

釜石市では、市内5か所に「コミュニティ支援員」という市の臨時職員を配置している。この「コミュニティ支援員」は平田地区生活応援センターにも配置されており、学びの場の企画や運営を行っている。配属して間もない頃は住民との信頼関係を築くことに苦労もあったが、8年目となる現在は、平田地区の住民の顔と名前を覚え深く交流し、住民たちの要望を吸い上げながら地域のニーズに合った学びの場の提供を行っている。

このほか、健康や福祉面での不安を抱える住民の相談に応え専門的な保健師をつないだり、地域を巡回して平田の実情をつかみながら住民たちの困りごとの解消に努めたりと、平田の支援員は地域の頼もしい見守り役、相談役となっている。

【学びの場の現況】

平田地区生活応援センターは2018年4月に新築移転した。それまでは、仮設住宅の一角に事務所を構えており、催しなどは旧釜石商業高校体育館で行っていた。しかし、体育館の広さに適さない催しもあり、冷暖房の面でも不都合があった。そのため、設備の整った新しいセンターの誕生に住民たちは喜んでいる。

支援員が企画運営する講座は多岐に渡り、楽器の生演奏を皆で鑑賞する「音楽サロン」や、市内で活動する童謡団体を招いて行う「童謡を歌う会」、作ってみたいという住民の声に応えた「お正月リースづくり」、「七宝焼き体験」などさまざまなジャンルのものを実施している。「七宝焼き体験」は山田町の県立陸中海岸青少年の家で行い、指導職員の講師料や送迎バスの料金は無償であった。他の講座についても、特定の技術をもつ市民の方にボランティアで講師を務めていただくなど、経費を抑え尚且つ住民が楽しめるように心がけている。

また、はじめはセンターの講座だった書道教室は、「和みの書」という名に変わり参加者による自主活動に発展した。センターは、参加者が自分たちで運営し活動できるように支援する役割も担っている。

【課題点・問題点とその対策】

被災地域としての大きな課題点は、「住民同士の人間関係」があげられる。災害復興住宅には平田以外の他の地域からも転居してくるため、震災以後平田地域のご近所付き合いにも変化があった。隣近所が知らない人ばかりで孤立してしまう年配の方もおり、地域住民間の積極的な交流から生まれるコミュニティづくりが現在の課題である。

このような年配の方々がセンターを訪れ学びの場に参加することで、交流が生まれ仲間をつ

ることができる。そのために、支援員をはじめとするセンター職員たちは、住民が興味を持てる企画を考え、直接の声かけのほか、毎月「平田地区生活応援センターだより」という情報紙を作成・配布し、センターで実施する学びの場の周知を図っている。

【今後の展望】

今後実施したい企画案として、「歴史講座」がある。平田地区で発掘された文化財に注目しながら、地元の史跡を巡り詳しい方に昔話を伺い、平田の歴史を深く学ぶものである。暮らしていてもなかなか知り得ない地域の歴史を知ること、地元の魅力を再発見し、平田への愛着が広がるのが目的だ。

支援員は「住民のなかに一人でも多くの笑顔を作りたい。そのために私はいる」と言う。他の職員は支援員の仕事をフォローしながら、支援員一人ではできない部分を補う。平田地区生活応援センターでは、今後も職員同士が支え合いながら、住民の文化的な生活の充実のために、学びの場の提供を積極的に行っていく。



小笠原氏へのヒアリングの様子

学びの場の現況についてのヒアリング調査②

宮古市中央公民館

ヒアリング対象者：熊谷 立行 氏（宮古市中央公民館 館長）

【学びの場の運営について】

宮古市では、中央公民館・中央公民館分館・千徳公民館・山口公民館の4館に常駐の非常勤公民館主事が配置されている。この4館の主事が定期的集まり話し合う中で、高齢者向け・親子向け・成人向けのように各世代にバランス良く各公民館で開催する講座の企画を考え決定している。一度実施して好評だったものや市民が継続を願ったものなど、参加者のアンケートを基にニーズを意識した講座のラインナップになっている。

また、講座の際には、他の公民館の主事が運営の手伝いに赴き、各公民館の連携協力を図っている。主事は講座を終えるとその事業の報告書を作成し、他の公民館の主事との情報共有にも努めている。

【学びの場の現況】

現在、中央公民館は築50年近く経ち老朽化が目立つため、昨年新しく完成した複合施設「イーストピアみやこ」に会場を移し講座を実施することが増えてきている。

また、講師については、市内で活動されているサークルの方や青少年の家の職員、歴史的な分野は市の職員が務める等、講座の内容に合わせた市内の適任者を主事が把握し依頼している。

講座のジャンルは多岐に渡る。親子対象のフラダンス教室が参加者による自主的なサークル活動に発展した例もあり、学びの場の提供が市民の趣味や特技を広げるきっかけになっていることが窺える。昨年初めて行った「色鉛筆画講座」は、参加者から「続けてほしい」「今回は初心者向けだったが次回は上級者向けにステップアップした内容をやってほしい」等の声があがり2回目へとつながったケースである。人気の講座は申込の段階で定員をオーバーすることもあり、その場合は臨機応変に講座の実施回数を増やすなど、市民の意欲を優先させるよう心掛けている。

また、講座開催中には市民ボランティアによる託児も行っており、小さな子どもをもつお母さんも安心して参加することができるよう努めている。

【課題点・問題点とその対策】

学びの場の実施における課題点として、「参加者の固定化」があげられる。公民館に足を運んだことのない市民も多く、まずは公民館がどんな施設でどのような講座を行っているのかを広く市民に知っていただくことが大切である。

そのための対策として、宮古市中央公民館では、市内のコンビニ・スーパーなどの商業施設にもチラシを掲示し市民の目に多くふれるよう、主事たちが積極的に広報活動を行っている。か

つては市の広報紙のみで告知をしていたが、その頃に比べて現在のほうが新規の参加者は増加している。今後は、ネット（SNS等）を活用した広報にも力を入れて、若年層にも学びの場の周知を図りたいと考えている。

また、講座参加者の満足度調査を行うほかに、一昨年からは、講座を企画運営した主事の満足度調査も実施している。参加者に楽しんでもらうことはもちろんであるが、そのためには実施する側の主事も講座の運営に充実感を得ていなければいけない。どちらか一方だけではなく、参加者も主事も楽しみながら講座を実施してゆくことが学びの場の継続や発展につながると宮古市中央公民館は考えている。

【今後の展望】

震災によって公民館の講座内容を変化させたことはほとんどないという。「震災があったからと特別な講座を企画するのではなく、震災以前から変わらない活動をこれからもずっと続けていくことが被災地にとっては大切なことだと思う。今までと同じように変わらない日常を届けることが私たちの仕事」と館長は話す。

肩肘を張らずに気軽に公民館に来て楽しんでもらうこと、そして参加者の今後の人生が楽しく充実できるようなきっかけづくりを提供すること。市民の学習と憩いの場として、たとえば子育て世代のお母さんの息抜きになれるような講座や教室を今後も実施してゆくことが宮古市中央公民館の展望である。



熊谷氏へのヒアリングの様子

学びの場の現況についてのヒアリング調査③

久慈市立図書館

ヒアリング対象者：土橋 久美子 氏（久慈市立図書館図書係長）

【学びの場の現況】

久慈市立図書館では、親子を対象とした学びの場の提供に力を入れている。

毎年冬休みに開催している「手づくりしおり教室」は、参加した子供たちが一人一人自由にデザインし、押し花やイラストなどをコラージュしてオリジナルの葉を作るものである。このコラージュに用いる材料は、図書館の職員が各々お菓子の箱や雑誌の切り抜きなどを持ち寄り準備したり、押し花については毎年春から夏にかけて講師の方が子供たちのために無償で提供してくださっている。このように市民との連携を図りながら、学びの場の運営は継続できている。

このほか、毎年夏休みにお話づくりから製本までを4回に分けて実施しオリジナルの絵本を完成させる「手づくり絵本教室」も参加者から好評である。

葉教室と絵本教室は主に図書館の職員が講師を務め、冬と夏の恒例行事となっている。「去年の葉は友達にプレゼントしたから今年は自分の葉を作りに来たよ」と言ってやってくる子など、毎年継続して参加する子供も多く、その子供たちが巣立ってもまた新しい子供たちが入ってくる。学校を通して講座の案内を出しており、定員を超えることもあるほど毎回たくさんの子供たちが参加している。

大人を対象とした「読み聞かせ講座」は、参加者が学校で読み聞かせボランティアを行うようになるなど外部への広がりも生んでいる。また、この教室をきっかけに、「やまねこけん」という朗読劇団体も誕生し、年に数回図書館で公演を行っている。集う観客は大人も多い。幅広い世代に愛されているこの活動に対して、図書館は稽古場の提供などの支援を行っている。

このほか、学びの場のアウトリーチとして、「図書修繕教室」を不定期で実施している。学校図書館のボランティアの方から「傷んだ本の修理の仕方を教えてほしい」という要望があり始まったもので、図書館の職員が実際に学校図書館に赴いてボランティアの方々に図書修繕の方法を教えている。地域の課題解消につながった例である。

久慈市立図書館の各種学びの場の実施は、運営する職員たちにとっても大きな学びとなっている。中高生の職場体験等のキャリア教育についても可能な限り受け入れており、職員も一緒に学習する姿勢を常に心掛けている。

【課題点・問題点とその対策】

図書館の職員には異動があるため、スキルのある特定の職員に学びの場の講師を任せ続けることはできない。そのため、全職員への継続的な育成が大切であり、職員によって技術や知識にばらつきが無いよう一定のスキルの保持に努めている。

また、「図書館ボランティアの育成」という課題がある。図書館では、本の修理や絵本の読み

聞かせのボランティアを募集しているが、単発だと参加があるが通年実施となるとなかなか登録者が集まらない現状である。活動日が平日になることも登録者が少ない理由の一つと考えられるため、実施期間や活動日の設定をあらためて検討し、市民の需要の把握に努めたい。

【今後の展望】

図書館はさまざまな分野を網羅しているため、どんなジャンルの講座も実施することができる。レシピを参考に料理教室もできるし、DIYの本に基づいて地元の大工さんによる日曜大工講座も開催できる。歴史的な古い文献も所蔵しているため、詳しい専門家に解説していただき歴史を学ぶ講座も行える。子供向けの教室は充実しているが、大人向けの講座が不足しているため、本と市民の生活を結びつけたこれらのような講座の開催が今後の課題として挙げられる。

図書館で学びの場を提供する理由として、土橋さんは、「都会と地方で知識の差があってはいけないと思う。地方だからできないと諦めるのではなく、知るだけでもいい。その知るきっかけに図書館がなれたら」と話す。

知ることによって人生は楽しくなる。少子高齢化が進み図書館を利用する市民が少なくなってきている昨今ではあるが、久慈市立図書館には、親子で相談しながら絵本を作る光景が確かにあり、そうして完成した世界に一冊だけの絵本は、毎年生み出されることでその子供の成長の証にもなっている。



土橋氏へのヒアリングの様子

.....

IV 現地の声

.....

市民劇を通してみる宮古の今と市民劇のこれから

みやこ市民劇ファクトリー 事務局長 白石 雅一

あちらこちらの白い息が重なり、大きなモヤのように上がっていました。帰路につく人々は思い思いに口を動かし、その仕草はどれも笑顔で冬の寒さを微塵も感じさせないほどです。

2018年2月11～12日、2日間に渡って公演された初めてのみやこ市民劇は、2000人に迫る動員を記録し大成功のうちに幕を閉じました。

私は今回の市民劇で、初心者ながらも舞台監督をさせて頂きました。

このお話を頂いた当初、正直、東日本大震災を経験したこの宮古市で、ここまで大きな文化芸術の花が開くとは想像出来ませんでしたし、何もかもがはじめてな舞台監督という立場に戸惑いも多かったです。

震災で甚大な被害を受けた私たちは、外部からの支援や様々な援助を得て、自助努力を重ねながら8年間でここまで復興しました。

失ったものは大きかったですが、多くの絆が繋がり、新たな希望の芽も生まれました。しかしその復興の過程で、歪みが生じてしまったのも事実であったと感じています。

事業を復興させようと日々邁進し、持てる力の全てを注ぎ込むあまり、心の余力を失ってしまった経営者。

被災した人々に寄り添うために自らを顧みず、寝る間も惜しんで仮設住宅に通い、心身を病んでしまったボランティアの方。

そして復興支援の長期化によって無償提供が当たり前と、支援に慣れてしまい、自立する気持ちを欠いてしまった人。

少なからず震災から復興の歩みの中で、それこそ、多くの死者や被災者を出した発災当時の地獄の様な状況から一刻も早く立ち上がろうとものがき、苦しんだからこそその歪みであるのだろうというのは明白です。

その様な方々がいることを理解し、さらに震災後、加速度的に人口減少、少子高齢化、人手不足が進む宮古市で今までになかった「市民劇」という、人も物も技術も要求される事業は、とてもハードルが高く「自分たちのことでまだいっぱいいっぱいなのに人は集まるのだろうか」「一度もやったことがない事業にどれだけの人が共感を示してくれるのだろうか」「たとえ公演まで漕ぎ着けたとしても誰も興味を持ってくれないのではないだろうか」など否定的な意見が浮かんで消えていました。

不安要素の多い市民劇、しかも初めてで舞台監督という大役、何故この役を引き受けたのかは、宮古市民文化会館の指定管理者でNPO法人いわてアートサポートセンターの理事長である、演出の坂田裕一さんの市民劇にける熱意、そして宮古市民文化会館のスタッフの佐々木芳江さんに寄るところが大きかったです。

特に佐々木さんは震災以降、イベントを企画したりボランティアをおこなったりして、多く

の人を巻き込みながら活動をしていました。自分もその活動に参加したことがあり、多少なりとも面識がありました。

彼女が今回の市民劇でメンバーを集めている、自身も演出助手として参加する。さらに「初めての試みで参加者が少ない」そう聞かされ舞台監督を依頼されたとき、「芳江さんの頼みであれば断るわけにはいかない」と思い依頼を了承しました。

舞台監督という立場で市民劇に関わらせて頂いてまず思ったことは、舞台経験、演劇経験が無いところからのスタートだったので、基礎づくり、土台作りに多くの時間が必要だということ。最終的な舞台の完成形をイメージできていなかったので、共通の認識づくりが必要だということ。舞台技術、照明技術、音響技術を扱える人材が地元にはいないことなど、課題が多く見わかりました。

それらの課題を公演まで10ヶ月も無い短い期間でクリアできたのは、坂田さんの市民劇にかける熱い想いと、先輩技術者や指導者の方々が足繁く宮古に通い、定期的に演技指導をして下さったり、何度も舞台設備を実際に使った研修会を開いてご指導して下さった賜物と思っています。

そして市民劇当日、こんなにも多くのお客さんに入って頂けると予想もしていなかった私は、只々圧倒されました。



第一回みやこ市民劇「拓け、いのちの道を～鞭牛和尚の挑戦～」

劇を楽しむ余裕もなく見に来ることも出来ないのではないか、市民劇から心は遠く離れているのではないか、震災の、復興途中の心の傷、歪みがまだ癒えていないのではないかと考えていた自分の浅はかさに、そこで気付かされました。

多くの方々が市民劇を心待ちにしている。新しい文化芸術の息吹を感じようとしている。震災から復興し自分の足で立ち、前にむかって進んでいる人たちがこんなにも大勢いる。そう感じた途端、心が震えるのを覚えました。

宮古は間違いなく復興に向かって進んでいる。それは復興工事や施設整備だけではなく、震災前のように郷土芸能を楽しみ、文化芸術活動に勤しみ、それらを発表し皆で分かち合い感動を共有する、そういった心のゆとりが、心の復興が確実に進んでいると感じられた瞬間でした。

市民劇公演終了後も、市民劇を盛り上げていくための活動が続き、みやこ市民劇に関わったメンバーらが主となり設立した任意団体「みやこ市民劇ファクトリー」の立ち上げがありました。

この団体は市民参加劇を通じて、新たなコミュニティづくりや演劇などの芸術文化の振興と発展を図り、宮古市民文化会館の事業提携団体として「みやこ市民劇」の継続実施のため、演劇や舞台技術等の学習、自主公演の実施や市民文化会館の運営協力などを目的としており、その一環として、二戸市でおこなわれた市民文士劇「九戸城と女たち」に数名の会員が舞台研修として、派遣・参加させてもらうことも出来ました。

今後も宮古市の舞台演劇の芽は花開き続けることと思います。今年の1月6日には「みやこ市民劇ファクトリー」としての第一回公演、音楽朗読劇「ひらけ！笑顔と希望の鉄の道」が市民文化会館中ホールでおこなわれ、会場一杯の約250人のお客さんを賑わせました。準備期間が短い中でおこなわれたこの公演の成功は、ファクトリーメンバーの自信に大きく繋がったものだと思っています。



音楽朗読劇「ひらけ！笑顔と希望の鉄の道」

最後に「みやこ市民劇」並びに「みやこ市民劇ファクトリー」の活動にご協力下さった皆様、そしてそれぞれの初公演を見に来て下さった観客の皆様、本当にありがとうございました。皆様がいからこそ、これだけ大きな文化芸術の大輪が花開いたものと思っております。

これからもこの花を枯らすことなく新たな花を咲かせられるよう、情熱という命の水を与え続けながら活動して参りますのでどうぞよろしく願い致します。

一音楽教室の現場からみた被災地・陸前高田

田村ピアノ教室 田村尚子

いわてアートサポートセンターとのご縁は今年で8年目になります。東日本大震災の津波によって住宅と共にピアノを流されてしまった生徒たちのために何台ものピアノを支援して頂いたことが始まりでした。

私も震災の津波で自宅兼教室を失いましたが、半年後から仮設テナントにてレッスンを再開し、毎年開催していたピアノ発表会も震災から2年目に野外での開催をもって復活させることが出来ました。私のピアノ発表会は二部制をとっており、第一部が個人の演奏、第二部は生徒たちの演劇による進行によって連弾や合唱の披露をしています。第二部の演劇の脚本を書いているのが久慈市在住のこむろこうじ先生です。こむろ先生が陸前高田市にお住まいだった際、お子様がピアノを習いにいらしていたことがきっかけで脚本を引き受けていただき、転勤で引っ越しをされてもお20年間脚本を書き続けて下さっています。そのこむろ先生から坂田理事長をご紹介いただいたことが、いわてアートサポートセンターとのご縁の始まりだったのでした。

震災後初の発表会から6度目である今年の発表会も先日、無事終えることが出来ました。震災の前日に「また来週ね」と言って見送った幼い生徒との「来週」は二度と訪れることがありませんでした。あまりにも多くを奪ったあの日からの時間は長いようで短く、私自身生徒達から学ばされることが多い日々でした。

震災後、生徒のご父兄のご厚意によりご自宅をお借りしてレッスンを再開しました。震災前に通っていた生徒に声をかけ始めましたが、戻ってきてくれたのは数えるほどでした。一変してしまっただけの生活を送ることで必死な子供たちへ、震災以前のようなレッスンを行うことは、私には到底出来ませんでした。ピアノを弾くことで、教室に来てくれることで子供たちがリラックス出来ればと考えていると、自然と私の指導も甘くなってしまい、生徒の技術面の低下も当然のことながらありました。仮設住宅での生活でストレスを感じている子供たちを癒す目的としてピアノや音楽があったのだと今になって感じています。

それから7年、生活が少しずつ元通りに向けて動き出し、指導もだんだんとレベルを上げることが出来ています。子供たちにとってもピアノ教室がリラックスして楽しめる場所というだけではなくピアノが上手になりたいという意識が強くなってきていると指導をしながら感じています。最近は音大を目指したいという生徒も現れ、坂田理事長のご紹介で東京の先生のもとへ定期的なレッスンに通うことにもな



ピアノ発表会の様子

ったのです。

しかし、時が経過したからといって全てが良い方向に向かっているわけではなく、心の不安定さを感じる生徒もいます。今まで通りの指導を続けながら、私が出れることでフォローをしていきたいと考えています。

また、元々進んでいた人口減少はご存知の通り震災後に拍車がかかり、子供の減少が著しい現状です。住宅再建等にもなう家計の状況の変化によって音楽教室に子供を通わせることを諦める家庭も見かけることが増え、多くの人々の生活にとって音楽は二の次になっているとひしひしと感じています。今後も音楽教室に通う子供たちは減少するのではないかと考えています。人々の心の豊かさをもたらすためにも、街全体の雰囲気をもっと芸術を重要視出来るようになればと考えます。それが人々の心の復興の手助けになると信じています。

また減少が見込まれるのは音楽教室に通う子供たちだけでなく、指導者も同様です。次世代の指導者たちが続々と現れてくれることを願っています。

指導をしている中で、子供たちは頑張っている親や大人の背中を見ているのだと節々で痛感させられます。今後街を引っ張ってくれる未来の大人たちが一人でも増えるよう、私自身恥ずかしくない姿で子供たちの指導をし続けたいと考えています。

復興とは何かと聞かれたらその明確な答えは未だに見出せません。しかし今後、復興のために、ここ被災地の人々にとっての音楽や芸術の重要性を高めていく必要があると考えています。何年かかるかはわかりませんが、そもそもゴール自体がないのかもしれませんが、一指導者として芸術復興に尽力していきたいと考えています。先に申し上げた通り、まずは人々にとってより芸術が身近になるよう、手を伸ばせばすぐに楽しめる場所に音楽がある街になっていくことを願っております。

最後になりましたが、現在何人もの生徒たちがピアノを弾けるようになれましたのも、震災後いち早く手を差し伸べて下さった坂田理事長をはじめ、いわてアートサポートセンターの皆様のご尽力があったからこそです。改めて心より感謝申し上げます。



田村ピアノ教室 ピアノ発表会の様子

三陸国際芸術祭について

三陸国際芸術祭 事務局長 千田 優太

「三陸国際芸術祭(以下、サンフェス)」は、東北の三陸地域(八戸市～石巻市)の郷土芸能を中心とした国際フェスティバルである。2014年度から毎年開催し、今年度の5回目が2019年2月～3月に予定されており、私は1回目から制作という立場に関わっている。始まったきっかけ等は、昨年度の提言書「震災から7年 被災地に新たなコミュニティを生む」の中の「Ⅲ いわて文化復興支援フォーラム ～第2部～」をご参照いただきたい。

ここでは、サンフェスがきっかけで郷土芸能に出会い、魅了され、仙台から大船渡に移住してきた私たち4人家族(妻、子2人)の視点から、サンフェスを運営してゆくなかで感じたことや、沿岸の郷土芸能に関わって感じたことを中心に書いてみたい。

2014年におこなわれた第1回を観て、金津流獅子躍大群舞を目撃してしまった妻は、それをきっかけに郷土芸能が好きになり、様々な団体で習う体験を繰り返すようになる。その熱がどんどん加熱し、家族で大船渡に移住することになった。縁もゆかりもない土地に移住してきたので、最初は地域の方に何者なのかと不思議がられた。ただ、移住してまもなく4年に一度のお祭り(震災の関係でこの年は7年ぶりだった)があり、私はそこで舞う権現様に参加させていただくことができた。妻は女性たちが出演する手踊りに参加。この練習をきっかけとして、地域の方々と多く知り合うことができた。また、権現様は、毎年1月に3日間かけて集落全部を一軒一軒廻る。

「あんた、見たことないなあ。どこの人?」「この前、〇〇に引っ越してきたんです!」

そこに参加させていただくことで、私たち移住者が地域の方々に溶け込む力を郷土芸能は持っていると感じた。

サンフェスはメインである郷土芸能が取り上げられることが多いが、その他の取り組みとして「コミュニティダンス」にも注目したい。コミュニティダンスとは、ダンス経験の有無に関わらず、誰もが参加することができる市民参加型の創作ダンスのようなものだ。第1回から毎年、コミュニティダンス作品を創作してきた。多いときには100人ほどの参加者がいて、出演者として市民がサンフェスを盛り上げていた。このコミュニティダンスをきっかけに、本格的にダンスを始めた人もいたほどだ。

その他にも気仙沼では「100年後のまつりの支度」というプロジェクトを2年間実施した。アーティストによる地域のフィールドワーク(調査)から材料を集め、市民参加型の新しいまつりを創造する内容だ。

この両者に共通して感じたことは、良くも悪



コミュニティダンスの様子

くも歴史があり、ある程度確立したコミュニティとしての郷土芸能との対比だ。新参者の移住者や周辺地域の人にとって、郷土芸能は入りづらいコミュニティでもあるということだ。そういった参加しづらい方々にとって、「コミュニティダンス」や「100年後のまつりの支度」は、良くも悪くも歴史の無い新しいコミュニティとして参加しやすかったようだ。市民劇の盛んな岩手県の気質にも合っているのかも知れない。昔から続いている郷土芸能としての出演だけではなく、新しいものを創るという入口もあり、より多くの人が参加(出演)できるということも大きな魅力になっていると感じている。

上記の二つの例を見るとサンフェスとの関わり方が大きく二つに見えてくる。一つは「鑑賞」という関わり方、そしてもう一つは「参加(出演)」という関わり方である。しかし、実際にはもう一つの関わり方がある。それが「運営」だ。運営とは、内容をどのようにしようかと企画を考えたり、当日お客様を迎え入れるための準備をしたりする方々である。

初年度から「地域に根ざした芸術祭にしたい」という思いがあり、県外から専門スタッフに来ていただくことももちろんあるが、地域住民のスタッフを大事にしようとしてきた。これは違う見方をすると、「地域を知らない人」と「アートイベントを知らない人」の知らない人同士での模索の日々でもあった。両方知っている人をどのように増やしていけるかが大きな課題である。短い期間での少人数での仕事は想像以上の激務だ。それを共に乗り越えてきた仲間でもあるので、卒業していった方々を含め今でも大事な存在になっている。今年度から「三陸国際芸術推進委員会」が立ち上がり、この運営面をしっかりとしたものにして体制的にも動き出している。運営の仲間を増やし、共に悩み、汗をかきながら進めて行ければと願っている。

サンフェスは、国境を超えた出合いや、現代芸術と郷土芸能のようにジャンルも超えた出合いが一番の魅力ではないかと思っている。私たち家族のように、人生を変えてしまうような出合いを。



三陸国際芸術祭の様子

大震災の記憶のために

いわて震災エッセイ2019 選考委員 池田克典

「特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター」は、平成28年度から岩手県の「NPO等による復興支援事業」に応募し、採択を得て「被災地・被災者からの思いを伝え語り継ぐ活動」に取り組んできている。この事業では、被災された方々などから、一昨年度は「詩」を、昨年度は「短歌」を募り、私もその一員である審査員の選を経て、入選作品を「作品集」としてまとめ、発刊、配布した。また、被災月である3月に行っている入選作品の表彰式当日には、選抜した作品により構成した朗読劇を上演するとともに、識者を招請してのフォーラムを開催した。

今年度の第三回は、「エッセイ」を公募した。これまでの詩歌の場合より、応募資格を本県在住者、出身者などと少し拡大したのは、「エッセイ」という比較的自由に綴ることができる分野であることと、支援者、来訪者など被災地、被災者と多様な関わりを持つ方からの応募もあるだろう、ということからだったと思う。また、震災から七年余を経過しており、直接の当事者からの応募が多数を占める、とは考え難かった面もある。

結果としても、今回は、直接の当事者からの応募は多くはなかった。一方、発災当時小学生で、現在高校生という若い方からの応募がまとまってみられた。学校等で奨励していただいたのかもしれないが、記憶に関していえば「一〇代後半から二〇代がエピソード記憶の機能が最も高い時期であるため、その時期に経験したことをよく覚えている可能性がある」ということである。この事業の目的が「記憶の伝達」にもあることからすれば、次に「記憶」を主題として記述できるような作品の公募をするときには、もう少し上の世代、現在二〇代、三〇代からの多数の応募が期待できるような要領の設定も工夫してよいかもしれない（引用は、増本康平『老いと記憶』（中央公論社刊）による）。ちなみに「エピソード記憶」とは、過去の出来事の記憶であり、加齢とともに衰えるとされている。

第一回の「詩」の公募には44編の応募があった。県詩人クラブ会長以下三名の合評により20編を選んで「いわて震災詩歌2017」を編んだ。選評に「時間軸の取り方や視点の置き方などにおいて、想像力を駆動させ、単純化を踏み越えた完成度の高い詩作品となっているのではないか」と記したが、震災から五年が経過していることによって、作品として言語化する状況になったのではないかと、というのが審査に当たった私たちの共通した受け止めであった。

表彰式後のフォーラムには、作家の外岡秀俊氏、詩人の城戸朱里氏の参加をえて、充実した談論が展開された。入選作品に基づく朗読劇も、ゲスト、参加者か



(左から) 高橋万見子氏、小山田泰裕氏、坂田裕一氏

ら構成やパフォーマンスについて高評価をいただいた。

昨年度は、詩に続くものとして、短歌を公募した。五首一篇として約百編が寄せられた。県歌人クラブからの二名と、第一回に引き続いて、いわば読者側の二名とで審査に当たった。そのジャンルの実作者と「読者側」とが会しての合評は、議論を交わしながらも紛糾することなく、いつも円滑に合意が成った。このときの最優秀作品については、審査員全員が一致して推している。今回もまた、全員が最高点を付与している。

私たちは、来年度もこれまでのような公募を継続したい意向を持っているが、県の事業であり、現段階では実施の有無は断言できない。継続する場合は、やはり「震災文学」といえるものを公募することになるだろう。

3・11のいわば「エピソード記憶」を記録するものとしては、東北学院大学・金菱ゼミの「震災の記録プロジェクト」の成果を超えるものは出ないと思われる。災後間もなくの『慟哭の記録』から最近の『3・11 霊性に抱かれて』まで、「現場」の証言に基づく記録集を出している。本県には、管見ながらこれに匹敵する記録はないはずだし、今から製作しようもないだろう（それらに本県の事例が収録されていても、それはまた別のことだ）。

今回も、フォーラムには引き続き外岡氏に出演をお願いした。外岡氏は、朝日新聞社の記者時代に綿密な取材に基づく阪神淡路大震災のルポ『地震と社会』（みすず書房刊）をものされた（なお、氏は、東日本大震災の約一年後には『3・11 複合被災』（岩波書店刊）を上梓されている）。

阪神淡路大震災後には、前述の上下2巻という大部の著書と、精神科医・中井久夫氏の編まれた記録集が早い時期に出版され、防災、生活の維持、復興に関心ある者を啓発した。私たちの一連の取組は、そうした直接的な啓蒙などには繋がらないものではあろうが、かといって、微力も持ちえないとは思わない。少しでも多くの実りを期して、今後も取り組まれていくべきものと考えている。



選考会の様子

.....
V ま と め
.....

まとめ

「文化による持続可能なコミュニティづくりへ」

特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター 理事長 坂田裕一

はじめに

震災から8年。

私たちは、3年前から文化芸術を核とするコミュニティづくりを、5つから4つのテーマ毎に課題と方向性を提言してきた。

平成27年度は『心の復興』を第一義として、「伝える」「学ぶ」「交流する」「出かける」「新たに興す」の5項目。

平成28年度は、心のひだに強く貼り付いた苦悩と失った命の叫びの向かう先を求めつつ、子どもたちが明日を信じて生きていくために、コミュニティを再生させるために、ふるさとに誇りを持ち続けるために、「伝える」「学ぶ」を継承し「育む」「出かけ交わる」「興し参加する」を加えた5項目。

昨年度、平成29年度は、刻々と変わるニーズに対応し、より強いコミュニティづくりと、次世代育成の展望を見据え、「語り継ぐ」「広く深く学ぶ」「交流し育む」「参加し継続する」の4項目で提言した。

そして平成30年度の今年度は、持続可能なコミュニティづくりへ、という主題で、文化の学びの場のアンケート結果や本年度事業から見える成果と課題を見据え、継続するという主題で、「学び続ける」「交流し続ける」「語り継ぎ続ける」「参加し続ける」の4項目で論述したい。

語り継ぎ続ける

震災エッセイの公募でも明らかになったのは、いまだに人々の心の中には語り尽くせない思いが深く沈降している、ということだった。もう7～8年前のことなのに、エッセイでは当時の思いが鮮烈に描き出される。「思い出」という生易しいものではなく、「心の底からの訴え」でもある。

震災で起きた心の傷や痛手、葛藤などをより深くかつ多面的に「記憶の深層」に刻み、それを表層に現出させることは、文学などの文化芸術の大切な役割なのである。

昨年の提言では次のように記した。

「風化されつつある震災の記憶を忘れて欲しくないという被災地からの悲痛な叫びは、小説や詩歌、エッセイ、映画・演劇など文化芸術の力によってこそ、効果を倍加させることができるのだろう。

そしてなにより、こうした作品を語り継ぐことこそ大切なのである。文化芸術は、そのジャンルを越えて融合し、より効果的に伝えることができる。……そして、心の底に沈降

した思いを浮上させるには文学の力は欠かすことが出来ない。同時に、その浮かび上がる思いを語り継ぐには、言葉や文字だけではなく、多様な文化芸術の力が必要だ」

平成31年度以降も語り継ぐ活動は途切れることなく続けたい。そして、それは広く被災地以外にも広めることで地域を越えた共感を得ることが出来るのではないだろうか。

学び続ける

芸術文化の学びの場にかかるアンケート調査を行った。沿岸12市町村（全部からの回答有り）、文化施設・団体（68団体へ依頼、40団体回答）、一般市民（34名回答）の3つに分けて調査を行った。一般市民からの回答は地域的な偏りが多く回答者も少なかったが、自治体と団体は、ほぼ現況を把握できる回答数だった。

これまでも、地域からの聞き取りで、被災地での高齢化と人口流出は、全国のどこより加速しており、華道・茶道・書道など暮らしに密着した生活文化から、美術・音楽・演劇といった芸術文化まで、担い手不足は深刻であることが再三、訴えられていた。

基本的に、この状況は少しも変わっていない。

本誌の「IV 現地の声」でも、陸前高田市で音楽教室を営む田村尚子先生は次のように述べている。

「元々進んでいた人口減少はご存知の通り震災後に拍車がかかり、子供の減少が著しい現状です。住宅再建等にもなう家計の状況の変化によって音楽教室に子供を通わせることを諦める家庭を見かけることが増え、多くの人々の生活にとって音楽は二の次になっているとひしひしと感じています。」

個人レッスンを核とする表現においては、少子化と地域経済の脆弱性も相まって、指導者の生活基盤さえ弱体化させ、被災地において新たに指導者の道を歩むことを困難にしている。指導者不足・後継者不足は「市場の力」「個人の力」では補いきれない段階に来ているのではないだろうか。

文化芸術基本法では、第二条（基本理念）の3で、「文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利であることに鑑み、国民がその年齢、障害の有無、経済的な状況又は居住する地域にかかわらず等しく、文化芸術を鑑賞し、これに参加し、又はこれを創造することができるような環境の整備が図られなければならない」と記されている。

沿岸被災地では、この条文はいまだに空文化の状況に置かれている。

アンケートでは、市町村主催の学びの場があるという回答は33%。施設や団体では35%だった。いずれも低い。運営上の課題は、予算不足が自治体で50%、施設団体で43%と近い数字だが、指導者不足は自治体で75%、施設団体で29%と開きがあった。ジャンル別でみると、自治体主催は、文学が一番多く38%、次いで美術25%と続くが、音楽・演劇・生活文化はほぼ同じで12～13%。その一方で、施設団体では生活文化が41%と突出し、美術22%、舞踊（ダンス）と音楽が11%、演劇と民俗舞踊は各4%となっていて、両者の違いが際立つ。予算と指導者以外の課題では、両者とも、参加者不足、参加者の固定化が50%以上と高くなっている。

それでは、どういう学びの場を必要と考えているのだろうか。

自治体では、すでに実施している自治体では約半分が、演劇と音楽を考え、未実施の自治体では、民俗芸能と音楽がともに23%、演劇が18%となっており、これらを実施できない理由として、ノウハウ不足が63%、指導者不足50%が挙げられている。これに対し、施設団体では美術と生活文化が高くともに50%、次いで文学36%と、市町村側とのずれがわかる。また、市民側の参加したいジャンルは美術42%、音楽30%、演劇21%の順になっている。

そして、初心者対象の学びの場として、市民がどんな場を求めているのかということ、公民館35%、公立文化施設26%、地域の劇団や楽団21%、地域内の指導者・個人教室18%となっており、中級者対象では公民館、公立文化施設、地域内の劇団・個人教室の3者が24%で並ぶ。

このことから、公民館や公立文化施設の役割が大切であることと、施設や団体が行うとしているジャンルと市民のニーズでは乖離があることがわかる。

公立文化施設や公民館は、発表の場であり学習の場であるが、どちらかという利用施設としての貸スペースの役割に重きを置く場合が少なくない、と従前から指摘してきていたが、アンケートでも学びの場としての事業を行わない施設は少なくなかった。勿論、貸スペースの役割も住民の自主的な発表の場、学びの場を保障するために大切である。同時に、積極的に住民の潜在的な文化ニーズを掘り起こす「学び」の事業を展開することも欠かせない。

劇場、音楽堂等の活性化に関する法律（以下「劇場、音楽堂法」と略す）の第三条（劇場、音楽堂等の事業）の1で、「実演芸術の公演を企画し、又は行うこと」、2では「実演芸術の公演又は発表を行う者の利用に供すること」とあり、3で「実演芸術に関する普及啓発を行うこと」が記されている。

これまで学びの中心にいた公民館が予算の削減（全国的な傾向）と、民間カルチャーセンターとの競合を避けるため、文化系講座を減らす傾向にある。翻って、文化会館はアウトリーチ（教育普及活動）の重要性が叫ばれ、会館のみならず会館外での普及活動にも力を入れはじめている。しかし、この傾向は都市部を中心とした動きで、そもそも学びの拠点が脆弱な被災地では、文化会館や公民館を問わず、学びの場の確保について、努力が必要である。地域内の施設、団体が協力し合いながら学びの場を広げる必要がある。



二戸市民文士劇 舞台研修

指導者難については、外部指導者（県内外）を期待する声が少ない。これは地域内の指導者が少ない、あるいはジャンルによっては不在であるという証左でもある。また、前述のように、地域経済と少子化により、個人の教室そのものが成立せず、結果として、ますます学ぶ環境が狭くなるという状況も見える。文化会館や公民館と個人教師が連携する方向性も考える必要

があるかもしれない。

また、指導者が地域には不在のジャンルについては、県内外からの講師派遣が必要となる。さらに、そのジャンルを定着させるとなると、中長期の継続的な講座等が必要となる。これには、指導者自身のスケジュールや、移動にかかる経費負担の課題が生じるが、沿岸被災地では、それを工面する経済的余裕がまだない。地域全体、社会全体で補う知恵が必要である。

次に、次代を担う子どもたちの学びの場である。

子どもの持続可能な育むシステムの端緒として、本事業を活用して宮古市には平成27年度にみやこジュニアアンサンブルが、28年度に子ども劇団が発足し、順調に活動が展開されている。

こうした活動が沿岸全域で行われることは望ましいことだが、地域の核となる都市では是非実現させたい。久慈、宮古、釜石、大船渡（陸前高田）での実現もフォローしたい。また、中学、高校での表現活動も大切である。音楽部、演劇部、美術部等の部活動が、一定の人数を抱える高校では持続的に展開されたい。しかし「熱心な先生がいないから」という声も聞く。授業科目でもある音楽は、音楽教師が必ずいるので部活は成立しやすいが、演劇は「熱心な先生」がいないと部自身も成立しにくいという。民俗芸能の部活が、地域の指導者を招くように、演劇もまた地域の指導者を招くことも必要である。

このためには、中学、高校と文化団体ばかりではなく、情報が集まりやすい公立文化施設などとの連携も欠かせない。

交流し続ける

震災支援活動は、日頃の地域を超えた交流の必要性を実感させた。

震災後、復興支援や心の癒しのために多くのアーティストが被災地を訪れ、貴重な文化芸術体験の場を与えていただいた。美術・音楽等被災地以外では考えられないような一流のアーティストと気軽に交流できる体験をした。その貴重な文化芸術体験は、生涯、心のなかに生き続けるだろう。しかし、それが持続可能な活動のきっかけとなっていれば嬉しい限りだが、残念ながら、そうした例は決して多くない。

何故なら、交流と文化芸術体験から活動継続への持続可能なシステムが立ち上がっていないからである。

昨年は、交流について、次の三点について論じた。

① 地域間の交流（出かけ交わる）

震災以前、内陸部と沿岸部の文化交流は薄かった。距離の難点が交流を疎遠にしていた。震災の支援活動によって交流は飛躍的に深まり、交通網の整備も進んでいる。しかし、支援活動が縮小しつつある中、交流自体も縮小する可能性もある。地域間の人的交流促進

「いわてリーディングシアター」チラシ

は欠かせない。

② 世代間の交流（ともに育む）

地域内の民俗芸能は世代間交流の最たるものだが、現代的な表現においても世代間交流は必要である。特に、集団で作り上げる演劇や伝承が欠かせない民俗芸能は、意図的に世代間交流をすすめる必要がある。

③ ジャンル間の交流（刺激し合う）

異ジャンルの交流も大切だ。三陸国際芸術祭はコンテンポラリーダンスと民俗芸能の交流から生まれた。さらに、他国との芸能交流も生まれている。「語り続ける」ことにも通じるが、震災からの記憶の発信は、文学や演劇人に委ねるだけではなく、住民自らが表現活動を外部に発信させることも必要である。

こうした交流を持続可能にするための努力が求められる。

宮古市と二戸市では市民劇を通じた交流が芽生え始めている。遠距離で片道3時間近くの時間を要する。簡単に交流できる距離ではないが、ともに県央部とは距離があり努力を要しないと交流ができないからこそ、交流の絆は強くなる。

課題は交流し続けることである。交流によるコミュニティは交流の継続によって生まれる。

参加し続ける

岩手県内で実施される市民参加劇は、昨年度、新たに「みやこ市民劇」が発足した。北は二戸の市民文士劇から南は一関まで18か所となった。

町民劇場として継続していた西和賀町は、諸般の事情から、銀河ホールの「演劇部」として衣替えた。青年演劇時代から脈々と演劇を育んできた町なので、市民参加型の演劇がなくなるのは寂しい限りだが、新たな試みでの再出発を期待したい。

釜石市では、待望の新しいホールができ、震災後、仮設の催事場で行われていた市民劇場が、やっとホールに帰ってきた。しかし、運営のあり方が、震災前と、現在では若干異なっている。以前は、ホールの自主企画事業として行われていたが、今は、完全に市民企画事業となっており、ホール側の関与は限定的だ。ホールの指定管理者制度導入による影響と思われるが、遠野物語ファンタジーからの県内市民参加劇の伝統である「自治体・ホール・市民の協働」が直営・指定管理を問わず、実現されることが望ましい。

平成30年2月に行われた「みやこ市民劇」第一回公演の成功は、市内に大きな反響を呼び、市民劇継続の道を拓いた。

市民参加劇の役割として、一昨年 of 提言で次のように記述した。

「参加する文化活動を継続させ、それをコミュニティの核とするために、祭り芸能が大きな役割を果たすことは、今度の震災後の祭り芸能への市民の共感で証明されている。しかし、仮設から災害公営住宅への移住、新たな造成地への住居新設によって、かつての地域コミュニティは離散し新たなコミュニティづくりが求められてきている。それには、地域に

根ざしてきた祭り芸能以外にも気楽に参加でき協働してつくりあげる「もうひとつの祭り」を興すことが求められる。多くのジャンルが融合でき、いろいろな立場から参加が可能な市民参加劇は、「もうひとつの『文化』の祭り」でもある」

そして、昨年は、この「もうひとつの『文化』の祭り」を継続するには、忍耐と努力が必要である、と述べた。

「みやこ市民劇」の実施に実に2年を要した事実。多くの反対や成功への懐疑的な意見があった事実。黒澤明の映画「七人の侍」のように、地道な仲間づくりと互いにぶつかり合いながら信頼感を高めあうという試行錯誤の結果が成功につながったが、その陰で大切な仲間が離れてしまうという負の面も見過ごせない。「初回の経験」は、次の成功に向けてのステップにならなければならない。そのために昨年、本誌で提言した10項目を再掲する。

- ① 市民による舞台技術やスタッフワークの継続学習
- ② 地域素材に関する掘り起こしと磨き上げ
- ③ 出演者の基礎練習の継続
- ④ 市民メセナ（市民や民間団体からの資金援助）の確保
- ⑤ 公的助成金の申請
- ⑥ 文化会館内あるいは市内でのストックスペースの確保
- ⑦ 文化会館職員の協力体制
- ⑧ 市長等市内有力者の理解
- ⑨ 自由に集える場の確保
- ⑩ 市民参加劇をコミュニティとする市民の組織

宮古市は、みやこ市民劇の成功で新たな市民文化の息吹を肌で感じた。観客アンケートでは98%以上の方が継続を訴え、参加者アンケートでは80%以上の参加者が「次も参加したい」と答えた。

宮古市は、平成31年度からの指定管理者再公募（5年に一度の公募）で、応募条件として「市民参加劇継続への配慮」を新たに追加した。異例の配慮である。市と指定管理者と市民が「市民劇を一緒に継続していこう」という強い意志の表れでもあった。

そして、もっとも嬉しかったのは、市民組織「みやこ市民劇ファクトリー」の結成である。市民劇実行委員会と宮古市民文化会館、そして出演者の代表は、共同で市民劇参加を対象に「みやこ市民劇ファクトリー」の結成を呼び掛けた。上記提案の①②③⑩に対応する動きである。



みやこ市民劇ファクトリー 旗揚げ公演

呼びかけ前から、継続する活動をしたいという声は参加者から散発的に上がってきてはいたが、蓋を開けるまでは何人集まるか不安だった。結果は30人を超す参加者。本年1月には、初の自主公演「音楽朗読劇」を実現させ、2月17日には盛岡でも公演を行った。次回市民参加劇のための基礎訓練、地域の素材(宝)の発掘にも余念がない。朗読劇は「三陸鉄道」とタッグを組み、地域との協働も怠りない。予想以上の成果だが、これを社会や自治体、文化会館がしっかりフォローしていく協働の体制の堅持も欠かせない。

次に、いまだに市民参加劇の実施が少ない沿岸被災地への働きかけが必要である。本年度は、陸前高田市での市民劇のビデオ上映会などによって、理解者増に努めた。また、釜石市や久慈市(おらホール劇場)の視察を行い、継続のための課題を探った。

陸前高田市では新しい文化会館の開館が予定(平成32年度当初)されており、それを契機に本格的に動き出すことが望まれ、平成31年度はしっかりと市民理解を広げる必要がある。



みやこ市民劇ビデオ上映会(陸前高田)

釜石や久慈では、市民参加劇の共通の課題である「指導者難」「世代交代の難しさ」「継続するためのモチベーションの保持の難しさ」が明らかになった。被災しているがゆえの人材流出や社会全体の支援不足もその要因である。これらの課題に時間をかけ丁寧に対応することが求められるとともに、社会的支援や外部の専門家の助言支援が欠かせない。

おわりに

文化芸術による持続可能なコミュニティづくりは、文化芸術の役割を単に個々の表現活動の範囲としてとらえるのではなく、「文化芸術によって生み出される様々な価値を……観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない」(以上、文化芸術基本法)という視点から考えなければならない。

未曾有の大震災の傷はとてつもなく深く、それを癒すには相当の時間を要するだろう。その中で、文化芸術とは何か?文化芸術の必要性は?と、たえず問いかけてみよう。刻々と変化する被災地のニーズの中で、文化芸術は、柔軟にかつ大胆に立ち上がる勇気と、辛抱強く成果を待ち続ける忍耐を持つ必要がある。ハードとしての復興が大きく進展するなか、心の復興と、新たなコミュニティづくりは、今後の大きな課題であり、その先陣を文化芸術が担いたい。

この冊子は岩手県の「平成30年度NPO等による復興支援事業」の補助を受けた、
「文化芸術による新たなコミュニティ形成事業」で作成しました。

提言書 ～いわて文化支援ネットワークの活動から～
『震災から8年 持続可能なコミュニティ形成のために』

平成31年2月

発行 特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター
〒020-0874 盛岡市南大通1丁目15-7 南大通ビル3F
TEL 019-656-8145 FAX 019-656-8146

Eメール info@iwate-arts.jp

編集 株式会社reto

印刷 杜陵高速印刷株式会社



特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター